

だいちゃんのだいぼうけんシリーズの5
～ピラミッド編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「ねえ、本当にこの方向でいいの？」

だいちゃんは、覆いかぶさるツタや絡み付くイバラに辟易しながら、柿ただちゃんに聞いた。

「うん…、前は、飛んで来たからなア…でも、山の形からいって、こっちで合っていると思うの」

しかし霧が濃くなって来て、頼りの山も見えなくなりがちだ。

「ごめん…、ボクがちゃんと飛べたら…」

「うん、風すっかか悪くないの。ただちゃんが風袋を酷使し過ぎたのよ、きつと」

前回の湖の一件以来、風袋が不調なのだ。ふすふす言っていることも飛はない。風袋がなくても少しは飛べる苦の風すっかも、何故か不調で上手く飛べない。

「大丈夫、病気？」

「うん、この湿気のせいかもしれない、風は水に弱いから…」

この森に来てから、ずっと深い霧が晴れなくて、シマシマ合羽も乾く暇がない。下生えもきつくて、体力のあるだいちゃんも、いいかげん辟易していた。

それにしても、この森はどうも変なのだ。閉塞感があって、じわじわと居心地が悪い。三人ともそう感じて、早くこの森を

抜けだしたい気持ちで焦っていた。

「せめて休める場所を見付けよう」

下生えで歩けない柿ただちゃんを肩に乗せて、だいちゃんも疲れて藪をこげなくなって来た。

「そうだ、風すっか、お兄さんの発明した魔法、使える？あれでただちゃんを上空に打ち上げて。この周辺位なら見られるかも」

「うん、そうだね、やってみる」

風すっかかは一生命呪文を唱えたが、いつもみたいに景気良くは上がらず、柿ただちゃんはふらふらと五、六メートル上昇した。

「あ！駄目だ！」

風すっかか叫んだ。不調で集中が切れたのだ。柿ただちゃんは急に横滑りして、流されるように斜めに落ちた。

「あ…あ…あ…あー!!」

柿ただちゃんの悲鳴が聞こえる。

「柿ただちゃん!! どうしたー?」

だいちゃんは力を振り絞ってそちらへ藪をこいだ。途端、身体が軽くなった。藪を抜けたのだ。

「なんだ、こりゃ?!」

「だいちゃんがつんのめりながら叫んだ。

森の中にぽっかり平らな広場があり、その真ん中に明らかに場違いな建造物が建っていた。

二階建て位の高さの四角錐、一辺が十メートル程で、四角い石が積み上がって出来ている。

そう、どう見たって、砂漠の国にある『アレ』だ…。と言う訳で、だいちゃんの大冒険、ピラミッド編、スタート〜！

その、どう見たって『アレ』な四角錐のてっぺんで、柿ただちゃんが引っ掛かってジタバタしている。

だいちゃんがよじ登って救助した。表面は石積みの階段状なので、登りやすかった。

下まで降りると、風すっかが地べたにうずくまっている。

「どっしたの？ やっぱりどこか悪いの？」

「う…ん、ごめん、どっしたんだろっ？」ここに来たら、急に身体力が抜けて…、こんなの初めてだよ」

「風すっか？」

不安そうなだいちゃんの横で、柿ただちゃんが大声で言った。

「お腹が空いて力が出ないのよ、まずはお腹を満たしませよ

うー！

そういえば、だいちゃんもお腹がぺったんこだ。

このピラミッドは怪しいけれど、取り敢えず休める地形だし、腹こしらえておこう。

「さて、ご飯、ご飯、風すっかは休んでいてね」

柿ただちゃんは、階段のやや広めの段を利用して、店開きを始めた。だいちゃんは出来るだけ湿ってない枯枝を集めて、小さな缶で火を起こした。

「風すっか、ただちゃんの美味しいホットビスケット食べたら、すぐ元気になるわよ」

風すっかは頑張って笑顔を作って、柿ただちゃんの隣に座った。

香ばしい匂いがして、お皿にビスケットが並んだ。

「あ、コケモモのジャム出さなきゃ」

柿ただちゃんは風呂敷の所へ歩いて行って、小さな瓶を取って戻って来た。

「………風すっか!!」

「え？ 何？」

「お腹空いているのは分かるけれど、まだ『イタダキマス』し

てないよー！」

「えっ？ 何のこト？」

「とほけないで！ 九個あったバスケットが七個になってる！」

「ボク、知らないよー！」

「じゃあ、だいちちゃん？」

「僕はすつとこっちで焚き木を拾っていたじゃないか！」

「変ね…？ あ…あ…あ——！」

「どーした？」

「ピ、バスケットが五個になってるううー！！」

「…！ ちよっと待って！」

だいちちゃんは柿ただちゃんと風すっかを連れて、ピラミッドから離れた。

しばらく息を潜めていると、ピラミッドの石の壁からすつと手が伸びた。黄色い毛に覆われた、肉球のある手だった。

柿ただちゃんがそおとと近付いて、皿を引っ張った。手はバスケットを捜して宙を探る。だいちちゃんがその手をがしっと捕まえた。

「ぎゃああー！！」

石を通り抜けて引っ張りの出された子に、柿ただちゃんが飛び

掛かった。食べ物が絡んだ柿ただちゃんの攻撃力は五割増した。

「イタイーイタイーイタイー！」

程々の所でだいちちゃんが割って入った。

「酷いニヤア！ あんな焦げ臭いバスケット食べさせた上に、

何するニヤアー！」

柿ただちゃんの下敷きでじたばたするのは、額にヒマワリ模様のある黄色い猫だった。

「焦げ臭いバスケットですつてええ？！」

確かに柿ただちゃんはたまに成に近い料理を作るが、だいちちゃんも風すっかも、そんな恐ろしい事は、思っても口にしたりはない。

「そうだニヤア、供物にあんなマズイ物使つとバチが当たるニヤア」

「盗み食いしといて何言つてんのよー！！」

「ちよっと待ったー！」

だいちちゃんが柿ただちゃんを抱え上げた。

「供物って言ったよね。この石積みはお墓とかなの？」

「お墓じゃないニヤア、神聖な祭祀場なのだニヤア」

「そうなの…、だとしたら、そこを荒らした僕達がいけなかったんだよ、柿ただちゃん」

「うう…」

ひまわりの猫は胸を反らした。

「ニャア！ そうだニャア！ 我は神サマの使いだ…ソヨ！
偉いノダ！ オホン！」

限りなく胡散臭いが、機嫌を損ねない方がよさそうだ。何た
つて、こっちは道に迷っている。

何か言いたそうな柿ただちゃんを制して、だいちゃんはずや
うやしう言った。

「では、お慈悲深い神サマ、我々は道に迷って難儀しておりま
す。どうかこの場所で休む事をお許し下さい。それと、聡明な
神サマなら、ヒバの木のじーじの居場所をご存知かと？」

「ニャア！ オイラは神サマじゃないニャア、神サマの使い魔
ニャ。でも神サマの代りに色々託宣するのがお仕事ニャ。オホ
ン、ここで休むのを許してやるニャア。それとヒバの木は、あ
つちの方へ半日位歩いた『虹色広場』にいるニャ」

「虹色広場はホントよ…」

柿ただちゃんが小さい声でだいちゃんに耳打ちした。

「でも、その子はここで休んじゃダメだニャア」

ひまわりの猫は風すっかを指した。

「ど…う…」

柿ただちゃんがムツとして聞いた。

「その子は風の眷族だニャ？ この森にいちや、よくないニャ。
この神殿の神サマは水の神サマだニャ」

後ろでバツタリと音がした。風すっかが青い顔で倒れてしま
っている。

「風すっか〜！」

柿ただちゃんが駆け寄ってから、引き返してひまわり猫の胸
ぐらを掴んだ。

「ねえ！ 水の神サマなら水を抑える事も出来るんでしょ。
今だけ霧を抑えてくれるように、神サマに頼んでよ！」

「だ、ダメだニャア…」

「何でよー！」

「神サマがずっと行方不明なんだニャア。だからこの辺りの水
のバランスが壊れたまんまなんだニャア」

「か、神サマが行方不明…?!」

そうこいう内に、風すっかはどんどん顔が土色になって、
せえせえ言い出した。

「何とかしてよ！ 神サマの代理なら責任取りなさいよ！ ど
つか水の影響しない場所はないの！」

「ニャア…ピラミッドの中なら……」

「じゃあ、早く入れなさいよ!!」

柿ただちゃんにぶんぶん揺すられて、ひまわり猫はしぶしぶピラミッドに近付いた。

尻尾でとんとんとすると、石の段の一つに、すうっと穴が開いた。中に下り階段が見える。尻尾で何回かとんとんとして、だいちちゃんも入れる大きさの穴になった。

階段を下ると、意外と広い空間があった。空気も暖かく乾いていて、風すっかの頬に赤みがさした。

「もっと早くここに入れてくれたらよかったのに」

柿ただちゃんがしっかり残りのビスケットを抱えて階段を下りながら、ぶつぶつ言った。しかしひまわり猫は耳に入っていない。

「どっしりよう、どっしりよう…、風の精を水の祭壇に入れるなんて…、神サマに…、ほかにゃんサマに滅茶苦茶怒られる〜!」
ひまわり猫が半泣きなので、柿ただちゃんもさすがに悪かったかな、って思った。

「だ、大丈夫よ、アナタ、人助けしたんだもの。緊急避難って

やつよ。怒られたら一緒に謝ってあげるから。ほら、ビスケット食べなさい、元気出して」

「アంత達ほかにゃんサマの怖さを知らないからそんな口が言えるニャア。どんなお仕置きを受けるか…う…う…う…」

ひまわり猫は、ビスケットをほりほりむさほりながら、尻尾を逆立てた

「そんなに理不尽な神サマなら、仕えるのやめたらっ」

具合が悪くても風すっかの切れ味は健在だ。

「そもそも行方不明なんですよ、その神サマが戻って来る前に痕跡を残さず、おいとまするわよ」

柿ただちゃんがビスケットをぼろぼろこぼしながら言った。

少し元気が戻った風すっかも、だいちちゃんとビスケットを分けて食べた。

「これっぽちじゃあ余計にお腹が空くなあ」

「まかせて」

柿ただちゃんはちゃっかり運び入れた風呂敷を広げ、ポウルで粉を練り始めた。

「だいちちゃん、火の準備をしておいて」

「ほい来た」



「風すっか、卵割って」

「オッケー」

「くらくらくらくらー!!」

「あ、猫さんも、外から焚き木を拾って来てちょうだい」

「だーかーらー!」

「食べたでしょ、ビスケット」

「う……」

しばし後……四人はビスケットをお腹一杯食べ、だいちゃんの入れたお茶を頂いていた。

「美味しいニャア、ビスケットもさっきより美味しかったニャ」

「盗み食いよりのみんなで食べた方が美味しいだろ」

「ニャ……」

「お供えがまずかったらバチが当たるもんね」

「ニャア…、そうだニャ……」

「にににしてお茶を継ぎ足してくれるだいちゃんに、ひまわりの猫は決心したように顔を上げた。

「お…、お願いがあるニャア……」

ひまわりの猫は改まってこのピラミッドの事を話し始めた。



て。ミッドに奉られた神サマ…、ほかにゃんサマは、大昔、遙か西の太陽と砂の国からやって来た。

その頃のこの森は、水の流れが悪くて、しょっちゅう干ばつに悩まされていた。こんなに青々していなくて、低い木がぼつぼつしかない、森ともいえない場所だった。

ほかにゃんサマは、水のバランスパワーを駆使して森を生き返らせ、生き物達に住みやすくした。森の生き物達はほかにゃんサマに感謝して、故郷と同じ祭祀場を建てて大切に奉つてくれた。

「ふーん、黄色い財布を持って！ とか言うパワー？」

「それは風水、柿ただちゃん、話を引ッ掻き回さないの」

「オイラの祖先は大昔、ほかにゃんサマのお供をして砂の国から来たニャア。それから代々ほかにゃんサマにお仕えて来たニャア」

「あらまあ、究極の世襲制だね」

「そのほかにゃんサマがどうして行方不明になったの？」

ひまわり猫はしょんぼりになった。

「神サマのエネルギーは信仰心だニャア。長い年月平和でいると、みんなそれが当たり前と思って、信仰する者がいなくなる

ニヤ」

「神サマがエネルギーをなくすとどうなるの？」

「力が弱まってバランスを維持出来なくなるニヤ。森がだんだん快適な状態でなくなつて。平和に慣れた森の生き物達はそれを不満に思つて文句を言つて、それでますますほかにゃんサマの力は弱まるニヤア」

「堂々巡りだわね」

「ほかにゃんサマはある日、森に思い切り水を溢れさせてから、ピラミッドの地下の奥底にこもっちゃったニヤ。皆がほかにゃんサマの有難みを思い出したら、信仰心が戻るニヤ」

「……それで……？」

「皆、森を出て行っちゃったニヤア……」

「……だろうね……」

この、水底みたいな異常な湿度は、逆切れした神サマの作業なんだ。はた迷惑な……。

「信仰心つて、無理やり湧く物じゃないよ……。で、ほかにゃんサマはずっとこもったまんまなの？」

「呟んでもウンともスンとも言わないニヤア。オイラはほかにゃんサマに忠誠を立てているから、ほかにゃんサマの結界に入

れないニヤ。お願い、見て来て欲しいニヤア」

柿ただちゃんがムツとして立ち上がった。

「皆に信仰して貰えないって、駄々こねて引きこもっちゃった神サマになんか、付き合つてらんないわよ」

「そゆ言い方するなあ、ほかにゃんサマは偉大な神サマニヤア、恩を忘れて文句ばかり言っている皆が悪いんだニヤア……」

「この森を出たら風すっかも元に戻るって分かったんだから、

長居は無用よ、ね、だいちゃん」

「うーん、まあね……」

ひまわり猫は泣きそつな顔をした。

「ニヤア……！ ニヤア……！ 神サマをながしろにしたらハチガ当たるニヤア……！」

そんな猫を置き去りに、柿ただちゃんはとつとと石段を登り始めた。

「ニ……ニヤア……！ ひ、一人ぼっちで心細かったニヤア……。助けてニヤア……、怖かったニヤアよ……！」

ひまわり猫の大きな目から、涙と一緒に意地っ張りも落ちこちた。

「柿ただちゃん」

風すっかが重い身体を起こして、柿ただちゃんを呼び止めた。
「信仰心がなくなるのは、神サマだけのせいだけじゃなかったりするんだ」

柿ただちゃんは肩をすくめて戻って来た。元より立ち去っちゃう気はなかったんだけれどね。

「風すっか一族も土地によっては神サマ扱いなんだ。だからちよっとは分かる、ほかにゃんサマの気持ち」

「だいちゃんも風すっかの側に来て、腰を下ろしてズタ袋を開いた。」

「地下探検なら、ロープと懐中電灯かな？ インティ・ジョーンスの気分だね」

ひまわり猫が涙をしゃくりあげながら聞いた。

「いんでい・じょんすって何ニヤア？」

「潜ったり落っこちたりが好きなおジサンだよ」

風すっかが床をぼんぼん踏みながら歩き回り、ある一点で止まった。

「ここだな」

風をふっと吹かせると、たちまち地下への階段が現れた。

「水の魔法を破るのは風の魔法、この程度の結界になら、何と

か通用しそうだな」

「凄いいニヤア！ アンタも神サマなのニヤア？」

「さあね、でももし誰かが僕を神サマって呼ぼうとしたら、丁重にお断りするけれど」

階段は暗闇に向かって伸びている。

「ここはどの位深いの？」

「分からないニヤア、オイラはほかにゃんサマの使い魔だから、ほかにゃんサマに質問するなんて有り得なかったニヤア」

柿ただちゃんも一度肩をすくめた。

「アンタが改めなきやなんないのはその固定観念ね」

「かなりの迷路になっていそうだね、長い紐か何かある？」

ひまわり猫は壁に掛かっていた奉納品のタペストリーを外してほごいた。細い丈夫な蜘蛛の糸で、結構な長さになりそうだ。

「じつかり端を持っていてね」

「うん、オイラ、離さないニヤア」

ひまわり猫は真面目な顔で、両手の肉球の間の糸をしっかりと握った。

「頼むよ、…え…と、君の名前は…？」

「オイラ名前なんかニャア、ぼかにゃんサマの使い魔ニャア」

いかん……と、だいちゃんは思った…が、遅かった。柿ただちゃんの目がきらーん!と光って、くるっと宙返りした。

「それなら、それなら、ただちゃんが、グッドでイケてる名前を、付けてあげーるー!!」

くるぞくるぞくるぞくるぞ……。

「アナタの名前は、『ケッチャ〜ん!!』」

「ケッチャ…やだ、そんな変な名前!」

「そうだよ、柿ただちゃん、可哀想だよ」

「あら、ちゃんと意味があるのよ。アステカ神話にケツアルカトルって三つ目の蛇神サマが出て来るの、農耕と風の神サマ。そのひまわり柄が三つ目みたくて、自在に動く尻尾が蛇みたくだから」

柿ただちゃんは、時々、ホントに、どおでもいいマニアック知識を發揮する。

「でも、オイラ、ケッチャんなんて、ヤダ…」

「じゃあ、けつある太郎!!」

「……………ケッチャんでいいです……………」

三人はそれぞれの胸に糸を結わえた。中が分岐になっていて手分けする必要の出た時の為だ。

「じゃあ、ケッチャん、僕達行くね」

「しつかり糸を持っていてね、ケッチャん」

「頼んだわよ、ケッチャん」

「へう…、もう、どうでも呼んでくれフニャア…」

「ぼかにゃんサマを見つけて帰ったら、ピスケットを御馳走して差し上げるわ。さぞかしお腹も空いてらっしゃるだろうから。」

それでご機嫌も良くなって、ケッチャんも叱られないわよ」

三人は手を振りながら地下へ下りて行った。残ったケッチャんは、独りになってからボツンと眩いた。

「ピスケットくらいであの方が機嫌を直してくれるなら、苦労しないニャア…」

だいちゃん、柿ただちゃん、風すっかの三人は、用心しながら地下道を下りて行った。

壁も床も石造りで、通路幅は意外と広い。ほのかに明るいはほかにゃんサマの魔力だろうか?

階段が終わって平らな道をしばらく行くと、やはり分岐が現

れた。

「どこで分かれるの？」

「くすす…、柿ただちゃん、僕達にはこれがあるんだよ」

だいちゃんは懐から指し差し笹舟を取り出した。

「あー!! そろかあ!! だったらあんなに勿体付けないで、

「二つ返事で引き受けてあげればよかったのに」

「そう思う？」 柿ただちゃん」

「う…、いや…、ちょっと…、苦勞を感じさせないのは…、よ

くないかも…」

「そりてしよ」

だいちゃんはすまして指し差し笹舟を手の平に乗せた。笹舟

はいつものようにぐるんと回って、道の片方を指した。

歩きながら、風すっかが話し出した。

「神サマって厄介なんだよ、押し並べてプライド高いからね」

「でも、ケッチャんは悪い子ではないわよ」

風すっかはともかく、いつも優しいだいちゃんまでケッチャんに厳しいので、柿ただちゃんはついつい弁護した。

「それは、僕もそう思うよ。でもケッチャんの為に僕達が出来る事って、ほかにゃんサマを捜してあげる事だけだろうか？」

最初から森のみんなに、僕達に泣きついたみたいに素直になっ
ていたら、こんな事にならなかつたんじゃないかなあ」

だいちゃんの言葉に、柿ただちゃんも神妙に頷いた。

「ほかにゃんサマに必要なのは信仰じゃなかつたと思うよ」

「風すっかはほかにゃんサマが分かるの？ 会ったこともない
のに。」

「大体ね…、神サマって呼ばれるモノの正体は」

「ほかにゃんサマはインチキ神サマなの？」

「一概にインチキとは言えない。凄い能力があつて、皆の役に
立つ事をして、感謝されて、そこで神を名乗るかどうかは、本
人次第って事」

「……………」

幾つかの分岐を越えて、かなり歩いた所で、広い部屋に出た。

やたら天井が高い丸い広場の正面に、縦長の扉が一つある。

猫の目が描かれた扉には、猫手を模したノッカーが付いてい
た。この向こうに、ケッチャんが怖がっているほかにゃんサマ
がいるんだろうか？」

「ねえ、風すっか、ほかにゃんサマに会ったらどうする？ 正
直、僕、何て言って良いか分かんないんだ」

「ごめん、ボクも何も考えていない…」

香気な二人の前で、柿ただちゃんがズズスイッと背伸びした。

「決まっているじゃない！ 反省させるのよ！ ケッチャんみたいな純粋な子を困らせて、森をめちゃめちゃにして放りだして引きこもるなんて。そんな悪い子には説教くれてやんなきゃー！」

「…じゃあ、そこん所は柿ただちゃんに任せた」

「任せて！…でも、どしたの？ いつもはただちゃんのそういうの止めるのに」

風すっかがノッカーに手を掛けながら答えた。

「神サマは厄介なんだ」

ノッカーは予想に反して、ポテポテと気の抜けた音を出した。

「あ、あれ…？」

部屋がぐるんと回った感じがして、三人は尻餅を付いた。回った壁が止まると、今度はドアが部屋の両側に二つに増えている。

「何…！？ この調子で扉が増えてくって畏っ！」

だいちゃんが笹舟を掲げてみたが、船先はぐるぐる回って定

まらない。

「笹舟にも判断しかねるって事？」

「おっ、笹舟、しっかりしろー。ほかにゃんサマだよ、ほか・

にゃん・サ・マー」

笹舟は変わらず、回り続ける。

「じゃあ笹舟サン、私、柿ただちゃんはどっちに行ったらいいかしら？」

すると笹舟は今度はピタリと片方の扉を指した。

「おや」

「こっちでいいのか？」

「待って、念の為、それぞれ別々に聞いてみて」

「えー？ 同じだと思っけれどなあ…」

「いいから！」

「笹舟く、風すっかはどっちに行きましょうかねー」

すると笹舟は半分回って反対の扉を指した。

「えーっ！」

「や、笹舟、だいちゃんはやっ！」

笹舟は今度は風すっかと同じ扉を指した。

「……ただちゃんは…？」

笹舟はくると反対に向いた。

「……………」

「ただちゃんは大丈夫よ」

「ダメだよ、危ないよ」

「無理に笹舟に従わなくてもいいんだよ」

「うん……でもね、ここは笹舟に従った方がいい気がするの」

柿ただちゃんは気丈に言った。だいちゃんと風すっかもそんな気はしているのだけれど…。

「じゃ、柿ただちゃん、僕達が真後ろで見ているから、そっちの扉のノッカーを叩いてみて。何かあったらすぐに助けるからね」

「うん」

柿ただちゃんはニコッと笑って、扉の前で大きく深呼吸してから、ノッカーを叩いた。

今度はカンカンと良い音がして、扉はひとりでにきいと開いた。柿ただちゃんは扉に頭を突っ込んで、中を見ようとした。

「あ、待って、柿ただちゃん」

だいちゃんが手を伸ばすより早く、柿ただちゃんは、扉の向こうにいると吸い込まれてしまった。

「柿ただちゃん…!」

残った二人は壁に激突した。柿ただちゃんを吸い込むと同時に扉は消えたのだ。壁から柿ただちゃんに結わえた糸だけがしゅるんと出ている。

「柿ただちゃん!!」

風すっかが壁をどンドン叩いた。

「風すっか、落ち着いて…!」

だいちゃんが握っていた糸を離すと、糸はするすると壁の中へ吸い込まれて行った。柿ただちゃんは進んでいるようだ。

「僕達も行こう」

二人は反対側の扉に近付いた。

だいちゃんは猫手ノッカーを叩いた。カンカンと良い音がして、二人は開いた扉をくぐった。

扉の向こうは……砂の世界だった。

見渡す限り、砂、砂、砂……。振り向くと、今くぐって来た扉も、壁もなかった。

「酷いなあ…、どうなってんだ、ねえ、風すっか」

隣を見て、だいちゃんはシャックリしたみたいに息を呑んだ。

風すっかはいなくて、真っ黒い巨大な者が、だいちゃんを見下ろしていた。大きな大きな黒猫だ。

夜のように真っ黒だけれど、一本一本の毛の先がオーロラみたいな光を放っている。目は細く長く、地平線に沈む夕陽のように凝縮された金色だった。

「ほか…にゃん…サマ…?」

黒猫は首を動かしてだいちゃんを見た。

「確かに酷いモノよ、累々と続く砂の原。しかし我等は故郷に帰れぬ。魔力を持ち過ぎた水神を、人は脅威と決めつけ追い立てた。人が水神を要らぬと言うのなら、我は無理に抗いはしない。黙して去るのみ、それだけのコト…。さて、どちらへ行くか、使い魔よ…」

だいちゃんはギョツとした。自分の姿がケツちゃんになっている。いや、ケツちゃんじゃない、ケツちゃんと同じ黄色い毛並みだけれど、大分短毛で色も濃い。

そっと額に手をやってみた。ここにもひまわりの柄があるのかしら…?

だいちゃんは黒猫を見上げて何か聞こうとしたが、この身体の持ち主の意識が前に出た。

「私がすっとお供します。砂漠を越えて北に進みましょう。必

ずやばかにゃんサマを必要とする土地がある筈です」

ほかになんサマは金の目を更に細めてだいちゃんの使い魔を見た。

「我はもう信仰など要らぬ。信仰が集まると、妬み、嫉み、猜疑、争いが生まれる…、不思議な事に。ささやかにヒトを助けて、穏やかに暮らしたい…」

* * *

風すっかは戸惑っていた。

扉をくぐった途端、周りがホワイトアウトして、だいちゃんとはぐれた。そして自分は石造りの大きな建物の中にいた。

さっきまでのピラミッドの地下とは違つ。もっとずっと立派で、大きな窓から入る強い陽射しが、長い廊下にくっきりと影を作っていた。

「なんで…?」

風すっかは自分の影を見て呟いた。

「何で、猫なんだ…?」

風すっかの意志と関係なく、猫は廊下を歩いてきた。真鍮の盆に乗せた二つの酒杯を捧げ持っている。盆も酒杯も見事な細工の贅沢な物だった。

大層なアーチをくぐって、恐ろしく巨大な広間に出た。床は色とりどりのタイルでモザイクが施されて、豪華な造りだった。部屋の真ん中に巨大な玉座があり、大きな黒猫がゆったり座っていた。長い被毛の先が、天窓からの光にきらきら輝いている。

風すっかの猫は、きよろきよろしながら黒猫に近付き、正面で片膝付いた。

「人の神官の使者殿は、もうお帰りになられたのですか？」

黒猫は閉じていた目を細く開いた。

「短い用だったのでな」

少し投げやりの感じだ。

「また無理難題を持ち込まれたのですか？」

「今度の神官は水神が鼻に付くらしい」

「そんな…、太古から水を制し、河を治め、人に栄華をもたらして来たのはぼかにゃんサマではありませんか」

「人というのは、もっとももっと欲しがるのだな。己の能力で得られぬモノは、他人のモノを奪ってでも欲しいらしい。そして持ち過ぎると、他人に奪われぬようにと、必死になるのだ」

「……………」

「人の神官は民の心を独り占めして、己の富を確保したいのだ。」

水神を引きずり降り降ろしてな。我がこの地を追われる日は、そう遠くはなさそうじゃ」

「そんな…、ぼかにゃんサマ…」

「使い魔よ、お前は自由の身となれ。健やかに生きられるよう、護りを授けよう」

「私は護りより、未来永劫ぼかにゃんサマにお仕え出来る徴（しるし）が欲しいわい」

だいちゃんが次に気付いたら、見覚えある部屋にいた。ケツちゃんに最初に通された、ブリミッドの中の部屋だ。

だいちゃんは仰向けに寝ていた。黄色い猫が覗き込んでいる。

ひまわりの柄はない。

「私はそろそろ役目を終えるようだ…、後は任せたよ…」

仰向けのだいちゃんは、また意志と関係なく喋っている。

「森の生き物達に、ぼかにゃんサマの偉大さを説くのだ。信仰心はぼかにゃんサマの力を増してくれる。その力で皆を護る。素晴らしい循環だ。なくしてはならぬ…」

「でも、父上、ぼかにゃんサマは…」

「頼む…任せたよ…」

だいちゃんは、半泣きで覗き込む猫の額に、自分の手を当てた。その瘦せた手も、黄色い老いた猫の手だった。

霞んで行く視界の中で、手を当てた額にひまわりの柄が浮かんで行くのが、見えた。

風すっかは、今、目の前で息を引き取った猫から、ひまわりの模様を受け取った。頭の中がクリアーになり、自分の記憶も父親の記憶も、みんな鮮明に並んだ。

相変わらず意識が間借りしているだけで、身体は思い通りに動かせない。ボクはどっなっているんだろう？ ピラミッドはボク達に何を見せたいんだろう…？

風すっかの猫は、石の廊下を通って外に出た。あれ？ 階段じゃない？ と思ったが、外を見て、もっとびっくりした。

ピラミッドは、ケッチャんが住んでいたやつよりも、遥かに大きかった。

いや、同じピラミッドだ。柿ただちゃんが食卓を広げた見覚えのある大きな石が、うんと上にある。

ほかにゃんサマが、そのあたりで、空を仰いで立っている。

相変わらず美しい毛並みだが、銀の毛がちらちらと浮いている。

風すっかの猫は、石段を登って近付いた。

「逝ったか…？」

「はい…」

「では、祈りを捧げよう。あれは、我と共に砂の原を渡り、雪の剣山を越えた。我にとつて、もはや使い魔以上の存在だ」

「ほかにゃんサマ…」

「我にも、あれを叩くくらいは残っていよう」

「ほかにゃんサマ、やはり、皆の信仰を集める為、何かしましよ」

「父と同じ事を言うようになった。ああ、ひまわりの影響か…」

「ほかにゃんサマが力をなくす事はいけないんです。偉大な神であるほかにゃんサマが！」

「我はもう神はやめたのだ。皆の役に立ち、静かに暮らしたいだけだ」

風すっかはほかにゃんサマの言葉に驚いたが、それ以上にひまわりの猫の中の風のような感情に慄おののいた。

「ダメです、ダメです！ ほかにゃんサマはそんなコト言っちゃいけないんです！ いつまでも偉大な神でいるのです。我が一族が、子子孫孫、お仕えするのです!!」

ひまわりの猫はふわりと浮いた。ほかにゃんサマは身構えた。

「父親から、抑えていた感情まで受け継いだか！ よすのじゃ!!」

「ほかにゃんサマー!!」
地響きと共に土や岩が舞い上がり、風すっかの目の前がフラッシュして意識が遠くなった。

だいちゃんは目を覚ました。今度はどこで誰になってんだい？ しかし、手もお腹も自分のモノだった。よかった…。

すぐ側で、風すっかも頭を振りながら起き上った。

「戻って来た…」

ホッとした。

多分ケッチャンのご先祖であろう黄色い猫の感情は、寂しくて切なくて悲しかった。

二人は、今いる場所を見回した。凄く大きな地下の部屋だ。

沢山の柱が、不規則に立っている。天井を見て、その柱が太い木の根っこだという事に気付いた。

部屋の真ん中に、ぼおっと何かが光って浮いている。無数の根の檻に囲われた、大きな銀の猫だ。

「ほかにゃんサマー…」

二人は同時に呟いた。

ほかにゃんサマーの足元に小さい影が動いた。

「柿ただちゃん!!」

二人は根っこのジャングルをかいぐぐって、銀猫の下へ急いだ。

柿ただちゃんは、宙に浮かんだ猫の足に手を触れ、じっと上を見上げている。

固く閉じられた銀猫のまぶたからハタハタと涙が伝った。大粒の涙に顔を直撃されて、柿ただちゃんはケホケホとむせている。

柿ただちゃんもむせながら泣いていた。だいちゃんと風すっかは、そろそろと柿ただちゃんに近付いた。

「か、柿ただちゃん…?」

柿ただちゃんは、ぐしゃぐしゃな顔をして振り向いた。

「だ、大丈夫…?」

二人も精神的に参っていたが、柿ただちゃんの方がずっと参っていきそうだ。どんな目にあっただらう?

風すっかは、シマシマ合羽の裾で柿ただちゃんの顔を拭いてあげた。柿ただちゃんは、えぐえぐしゃくり上げながら、銀猫

の足の指を撫でた。

「ほかにゃんサマの心が伝わって来たの…、寂しくて、切なくて…」

二人も銀猫を見上げた。眠っている様にキュッと結ばれたまつ毛から、涙はもうこぼれていない。

「でも、ほかにゃんサマの心を一番に占めているのは、使い魔猫の子孫、ケッチャんの事。自分がこんな目に遭っているのに、ケッチャんを救ってくれって…」

「救って」

「そう、ケッチャんは…あっ!!」

柿ただちゃんは振り向いた。また部屋がぐるんと回った感覚がして、扉が一つ現れた。

「駄目よ、またそんなに力を使って…」

二人は銀猫を見上げた。相変わらず眠っているようだが、さつきより毛の艶がなくなり、パサパサした切れ毛が落ちて来た。

「分かった、行くわ…。必ずケッチャんを助けて、そして戻ってくるからね」

柿ただちゃんは決然と踵を返して扉へ走った。二人も慌てて後を追いつける。

ノッカーを叩き扉をくぐると、何と最初に下った石段だった。

三本の糸が上へ続いている。

ケッチャんの悲鳴が聞こえた。三人は階段を三段飛ばしに駆け上がった。

だいちゃんを先頭に広間に転がり込むと、そこにはトンでもないモノがいた。大入道のような真つ黒な恐ろしい化け猫…!!。それが、血のような赤い口から舌を垂らして、獲物を狙っている。足元にはケッチャんが、震えながらうすくまっていた。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい! ピラミッドの中に余所者を入れましたあ…」

大猫は有無を言わず大きな前足でケッチャんを吹っ飛ばした。

壁に叩き付けられそうになったケッチャんを、だいちゃんが飛び付いて抱きとめた。

「ふええん…ごめんなさい、ごめんなさい……」

ケッチャんは傷だらけの背中を逆立てて、震えている。

風すっかが勇ましく、化け猫の前に立ち塞がった。黒猫は稲妻のような目をぎらつかせて、仁王立ちになった。

で、でかい……! 風すっかがひるんだ瞬間、猫は耳まで裂

けた口を一杯に開けて、炎を吹き出した。

「どっひええええー!!」

だいちゃんはケツちゃんを抱えて逃げ惑った。天井に逃げた風すっかにも、炎の帯が襲った。

「くそっ!!」

さすがの風すっかも、炎を避けるだけで精一杯だ。

しかし次の瞬間、二人は凍り付いた。柿ただちゃんが、テシテシと、化け猫の前に進み出たのだ。

「危ない！ 柿ただちゃんー！」

「いくら何でもそこは違うだろー！」

化け猫はちっちゃい柿の精を睨みつけ、口を開けてまさに炎を吐こうとした。

……瞬間……！ 柿ただちゃんは猫の目と目の間をピタリと指差して叫んだ。

「アンタは炎を吐かない！ アンタは金魚を吐く!!」

途端に黒猫はうげえ……と口一杯の金魚を吐き出した。

床一面金魚がビチビチ跳ねる中で、だいちゃんと風すっかは目を点にして突っ立っていた。

嘩然としただいちゃんだったが、また黒猫と目が合った。血

走った目がつり上がる。柿ただちゃんに酷い目に遭わされた八つ当たりをしたそうだ。

「ひえっ！」

「怖がっちゃダメ！ ただちゃんと同じようにやってみて！」

「ひええ…、えと…えと…」

だいちゃんは後退りしながら唱えた。

「お、お前は、炎を吐かない……！」

しかし黒猫は、顎も外れよばかりの大口で、竜巻のような炎を吐き出した。

「ひええええええ!! うわっちっちっちっ……!!」

猛った黒猫は今度は風すっかに向いて、鼻から大きく息を吸い込んだ。

「オマエは炎を吐かない、金魚を吐く…」

しかしやはり風すっかも、炎に追われ逃げ惑う羽目になった。

「わあー！ ダメだよー！ 柿ただちゃんー！」

「怖いと思う心がヒトカケラでも残っていたらダメ！ 後、オリジナリティもない！」

「オリジナリティなんか要るんですかぁー？」

黒猫ははズスズシと部屋の隅に、ケツちゃんを抱えたいだいちゃんを追い詰めた。

「ひいー！柿ただちゃんー！」

「落ち着いて！炎を吐かせているのは、アナタ達の誰かよ。ケツちゃん、今までお仕置きで炎を吐かれた事、あった？」

「ニャ…、ない…ニャ…」

「ほら！アナタ達、黒猫と最初に対峙した時、『こいつ、火ィ吹くんちゃうか？』って思ったでしょ！」

「そっか!!」

風すっかが決然とした顔で黒猫の前に立ちはだかった。

「オマエは炎を吐かない!! オマエは…えと、ずんだ餅を吐くー！」

途端に、黒猫の目がぐりんと上を向いて、喉を掻き箸りながら、えろえろえろえろーっと黄緑色の餅を吐き出した。

「もうちょっとマシなモノ、思いつかなかったのお〜！」

部屋一杯のずんだ餅に押し流されながら、柿ただちゃんは文句を叫んだ。

「あっちだー！」

「だいちゃんはケツちゃんを頭上に乗せて、ずんだ餅の波に翻弄されながらも、外へ続く階段へ向かった。

「柿ただちゃんー！」

「なあにー？」

「寒鯽かんぶりも出していいー？」

「好きにしてちょうだいー！」

四人はピラミッドの出口から転がり出た。

広場の端まで走って振り向くと、石垣の隙間から、ずんだ餅がにゅるにゅると吹き出し、ピラミッドを膨張させて、どかあんと崩してしまった。全身にずんだ餅と金魚をくっ付けた黒猫が、のたうちながら現れた。今ならあんまり怖くない。

「よし、チャンスだー！」

「だいちゃんは黒猫の前に駆け出した。」

「お前はずんだ餅を吐かない、お前は…」

「フニャアア！ごめんなさい、ごめんなさい、堪忍して、ぼかにゃんサマあー！」

ケツちゃんがパニックって叫んだ。黒猫は再び悪鬼の形相になり、だいちゃんはまた炎から逃げ惑う羽目になった。

逃げた先に柿ただちゃんが仁王立ちしていた。

「うああ、ごめん、もう調子に乗らないよおー！」

しかし柿ただちゃんは、だいちゃんを素通りして、ケツちゃんの両肩を引っ掴んで、額がこっつんこする位顔をくっ付けた。

「ケツちゃんー！ぼかにゃんサマは、こんなに酷い事しないー！」

「ニャ…」

「ほかにゃんサマはケツちゃんを大切に思っている。それに、ほかにゃんサマは、信仰なんて欲しいと思っていない！」

ケツちゃんの目が見開き、四人に迫っていた黒猫はひたりと停止した。

「いっっっ」

柿ただちゃんは更にケツちゃんに顔をくっ付けた。鼻と鼻がずんだ餅でくっ付いた。

「アナタは、一度も、ほかにゃんサマに会った事はないのよ!!」

ひまわり猫は勿論、だいちゃんも風すっかも啞然とした。

「う、うそ…、オイラ、小さい時からほかにゃんサマと暮らしていたニャア」

「ケツちゃんのお父さんが亡くなって、ひまわりの模様を受け継いでからでしょう」

「お父が死んだのはちっちゃい時だったから覚えてないニャ。ほかにゃんサマがオイラとずっと……」

「ずっとは、いなかったよね、ケツちゃんを、叱る時にだけ、現れたでしょう」

柿ただちゃんは優しくゆっくり言った。

「……………」

「それでどうして偉大な神サマだって思ったの?」

「お父が…あれ…?」

「それは、ひまわりが…、ずっとご先祖が、アナタに刷り込んだ妄執なの」

「ニャア! ニャア! デタラメニャア!」

「本当のほかにゃんサマは、地下にずっと閉じ込められているの。そして、アナタの事、とっても心配しているのよ」

だいちゃんと風すっかは、さっき体験した事から、柿ただちゃんの言う事がなんとなく分かった。じゃあ、この化け猫は…? 二人は黒猫を見上げてギョッとした。さっきから動きの止まった猫は、半透明になって消えかけている。

「これは、マボロシ…、ひまわりが作り上げたマボロシなの」

「う、うそニャア!!」

風すっかはピラミッドの外へ出たのでちょっとぶら付いていたが、頑張って思考を巡らせ、柿ただちゃんに質問した。

「あの時…、ここが大爆発してピラミッドの大部分が埋まっちゃった時…、ご先祖の強い思いが、ほかにゃんサマを地下に封

じ込めてしまったの?」

「そうよ、後で後悔したけれど、もうどうやっても封印を解く事が出来なかった。それで、自分を責めるあまり、思い込もうとしたの。ほかにゃんサマが自分なんかにも負ける訳ない、あれは偽物だ! って。そうしてマボロシのほかにゃんサマを作り出してしまった。使い魔猫は代々、マボロシの神サマに支配され続けて来たの」

「ニャア……、ご先祖は悪い奴なの……?」

ケツちゃんは頭を抱えた。

「悪人ではなかったんだよ。ほかにゃんサマのコト、思っていた気持ちとは嘘じゃない。ただ、思い詰める方向が違ったから……」
風すっかが慰めた。そのご先祖の中にいたんだから、間違いない。

柿ただちゃんがケツちゃんに近付いて、肩に手を置いた。

「急いで受け入れなくていいのよ。ずっと支えになっていたほかにゃんサマだもの。ただ、今はこの現状を何とかしてちょうだい」

「ニャア?」

柿ただちゃんは目を上げて、辺りを見回した。

「ピラミッドは壊れてずんだ餅だらけ。森は相変わらずじめして、生き物が住めない状態。本当のほかにゃんサマなら、このままにして置かないわよね」

柿ただちゃんは何を言い出すんだ? だいちゃんは目をハチクリした。

「まず、この森を何とかしましょう、風すっかもしんどそうだし。さあ、アナタの事を心配している優しいほかにゃんサマなら、どうするかしら?」

「ニャア……、水を滞りなく流して、皆が快適に暮らせる森にするニャア」

「じゃあ、ほかにゃんサマ、お願い!」

柿ただちゃんは何と、大黒猫を見上げて言った。せつかく消えていたのに、黒猫は再び実体を取り戻して動き出した。

「柿ただちゃん!」

だいちゃんはぶらぶらの風すっかを抱えて、反対側へ逃げた。しかし黒猫は、さっきと顔付きが違った。落ち着いた涼げな顔をしていた。まるで地下のほかにゃんサマのように。

黒猫がズイと前脚を上げると、散らばった金魚達が空中に泳ぎ出した。もう一度前脚を振ると、ずんだ餅も黄緑の金魚になった。

そうして二色の金魚は、一斉に森の中へ泳ぎ出した。赤い金魚は明るい木漏れ日になり、黄緑の金魚は清々しい若葉となった。はじめじめした温気は消え、軽やかな美しい森へと変貌した。

「あれえ？」

風すっかが起き上って腕をぐるぐる回している。急に元気が回復したみたいだ。

だいちゃんは驚き桃の木な顔で、柿ただちゃんと黒猫を交互に見た。

「これがぼかにゃんサマの使い魔…、ケッチャんの本来の力の使い方のよ」

柿ただちゃんの言葉に、ケッチャんは鳩が豆鉄砲喰ったような顔をした。

「オイラ、何にもしてないニャー！」

「柿ただちゃん、使い魔も、神サマみたいな力が使えたの？」

だいちゃんの質問に、柿ただちゃんはすらすら答えた。

「ううん、ご先祖はちよっと変わり者のシャーマン程度だった。でも、ケッチャんは何の拍子か、急に凄い力を持って生まれてしまったの。ケッチャんの黒猫は暴走して、森を破壊するだけの力を発揮し始めた。だから、地下のぼかにゃんサマは力を振

り絞って、ただちゃんを引っ張ってワタシ達を呼んだんだわ」

「ええっ？」

柿ただちゃんが斜めに落ちてピラミッドに引っ掛かった事…、あの時からこっち方向に導かれていたっていつの？」

「地下に捕らわれたぼかにゃんサマにとって、誰か…、強くて優しい者を自分の所に導くのが、ケッチャんと森を救う最後の頼みの綱だったのよ」

「か、柿ただちゃん、なんでそんなにすらすら答えられるの？あの扉の向こうから、柿ただちゃんは何処へ行っていたの？」

あまりの名解説に、茫然と聞いてた風すっかが、やっと声を出した。

「あら、気付かなかったの？ ただちゃんにはすぐ分かったの

に」

「え…？」

「だいちゃんや風すっかが使い魔猫の中にいるのが…」

「えっ？ えっ？ …、柿ただちゃん？ ほ、ぼかにゃんサマの中にいたのお？」

「勿論、喋っていたのはぼかにゃんサマだけれど、心は同化していたわ…、寂しい寂しい心…」

柿ただちゃんは、しんみり顔になった。

「ほかにゃんサマ、寂しがってるニヤア…、ずっと地下で独りぼっちニヤア？」

黙っていたケツちゃんだったが、ふと口を開いた。ケツちゃんその言葉で黒猫は透明になり、森は溶けるように消えた。

「オイラ…、本物のほかにゃんサマに会いたいニヤア。でも、怒ってる？ ご先祖が酷い事したニヤア、オイラの口ト嫌いかニヤア？」

「そんな事ないわ、ほかにゃんサマはケツちゃんの事、いつも大事に思っているわよ」

「ホント！ ほかにゃんサマの寂しいの、オイラに会ったら、ちよっとは治ぬ？」

「ええ、勿論！ アナタが寂しいのも治るわよ」

柿ただちゃんが先頭切ってピラミッドに歩いて行き、ケツちゃんも「ピヨピヨ」と着いて行った。

だいちゃんと風すっかも後に続いた。瓦礫の隙間に、階段がきれいに残っていた。

石段を降りて、ドアの前で柿ただちゃんは立ち止まって、振り向いた。

「ケツちゃん、ほかにゃんサマはね…、ほかにゃんサマは、アナタのひまわりを消すつもりなの」

「ニヤア？ このひまわり？」

「そうしたらアナタの力はなくなるの。でも、その方がアナタの為にいいって…」

「うん、ボクもその方がいいと思うよ、ケツちゃん」
風すっかが言い、だいちゃんも頷いた。

「ニヤア！ ほかにゃんサマが言うなら、オイラ、力とかいうのがなくなっても、全然構わないニヤア！」

しかし、柿ただちゃんはまだ扉の前で困った顔をしていた。

「……やっぱり、黙っていたらダメだね、ちゃんと言わなきゃ」

「柿ただちゃん？」

「あのね、ひまわりが消えるよね、使い魔としてほかにゃんサマを無条件に慕っていた気持ちも、消えてしまうの」

「ニヤア？」

「アナタは、ほかにゃんサマを忘れてしまうの」

ケツちゃんのひまわりが消えると、ほかにゃんサマとの間を繋ぐ物がなくなり、ほかにゃんサマを忘れてしまう…。

これにはだいちゃんも風すっかもびっくりした。

ケツちゃんは尻尾を逆立てた。

「ダメニヤン！ ダメニヤン！ そんなの絶対イヤニヤン!!」

「ケツちゃん、アナタはぼかにゃんサマに会った事も、話した事もないのよ。あるのは、ひまわりに込められたご先祖の思いだけ」

「ニヤ、ニヤア〜！ オイラがぼかにゃんサマの事、こんなに好きな気持ちも嘘だって言っニヤアか〜！」

「……………」

言葉をなくしてしまった柿ただちゃんの横で、風すっかが言った。

「だけどケツちゃん、ぼかにゃんサマだってケツちゃんに会った事、ないんだよ。なのに、ケツちゃんの事、凄く大事に思っている。それはケツちゃんが使い魔でなくなっても、変わらないうと思っの」

「ニヤア…」

だいちゃんも言った。

「そうだよ、ケツちゃんがぼかにゃんサマを忘れても、ぼかにゃんサマはケツちゃんを好きでいてくれる。だから寂しくないでしよう。ケツちゃんも、きつとすべぼかにゃんサマを好きに

なれるよ！」

「ニヤア…、ホントに…？ オイラ、怖いニヤア…」

柿ただちゃんは一步引いて、扉の前をケツちゃんに譲った。

「大丈夫よ、ケツちゃん、強い心を持って」

ケツちゃんはみんなの顔と扉を交互に見て、「クンと唾を呑み込んだ。

黄色い手が扉を開き、三人も後に続いた。さっきの木の根の空間がそこにあった。木の根の中に、銀の猫が浮かんでいる。

ケツちゃんがおずおず近寄ると、銀猫は細く目を開けた。夕陽をギョッと凝縮したような目。

銀猫は身体をさわさわ揺らして両手を下に伸ばした。そうして、初めての生の声を聞かせてくれた。

「よく来たね…、使い魔の末裔…。そして勇氣ある旅人達…、本当に有難う……………」

三人が過去の幻の中で聞いたとの声より、優しい声だった。

「ぼ、ぼかにゃんサマ…、オイラのご先祖が悪いコトして「メロンサイイ…」

「気に病むな…、あれの想いを受け止めきれなかった我の不覚。

あれを余計に苦しめる事となってしまった。お前もなあ…」

「オイラ、苦しんでないニヤァー」

ほかにゃんサマは、大きな口の端を上げて、優しく微笑んだ。そうして両手でケッチャんの頬を撫でた。

「我もお前も囚われし運命は同じく…。せめてお前の枷を説くのが私の役目…」

ほかにゃんサマの手がぼつと光った。ケッチャんの額のひまわりも同じように光った。

「平凡に、幸せな猫におなり…」

「あっ…!」

柿ただちゃんが小さく悲鳴を上げた。

「どうしたの?」

「ほかにゃんサマの力が細くなって行く。本当に、ひまわりを消すだけの力しか残っていなかったのね…ああ…」

ほつべに涙を伝わす柿ただちゃんの面筋で、だいちゃんとう風すっかもその肩に手を置いた。

なんて寂しい、切ない神サマなんだろう…。

ケッチャんのひまわりが見えない位に薄くなってきた。

「……ラ……ニヤァ……」

「c.c.」

「オイラ、嫌ニヤァー!! やっぱり嫌ニヤァー!!」

ほかにゃんサマの手を払いのけて、ケッチャんは飛び上がった。

「ケッチャん!!」

「よすんだ!!」

「オイラ、ほかにゃんサマを忘れるなんて嫌ニヤァー! ほかにゃんサマが力を使い果たすなんて、もっと嫌ニヤァー!!」

銀猫は慌ててケッチャんを宥めようとした。

「お前の幸せの為なのだ」

「オイラの幸せってナニ? オイラほかにゃんサマのいない所で幸せになんかならないニヤァァ!!」

ケッチャんのひまわりが急に形を成して、強く輝いた。ほかにゃんサマは渾身の力を発して、その光を抑え込もうとする。

力と力がぶつかり合って凄いい光が放出され、三人は目を開けていられなくなった。

……

どれだけ時間が経ったのか…?

地面に伏せていた三人は、くらくらと顔を上げた。部屋の中
央に、ぽかちゃんサマは……いなくなっていた。

黄色い毛並みのケッチャちゃんが、一人でうずくまっている。

「ケッ……ちゃん……？」

三人は恐る恐る近寄った。

「ニヤン？」

振り向いた黄色い額には……ひまわりがなかった！

ケッチャちゃんは、憑き物が落ちたような、あどけない表情だ。

ぽかちゃんサマが一身を捧げて、ひまわりを消し去る事に成功
したのだ。

「ケッチャーン！」

柿ただちゃんが駆け寄って、ケッチャんに抱き付いた。

「あああー！」

「どうしたの？ 柿ただちゃん？」

二人も駆け寄って、そして、何ともいえない呻きを上げた。

ケッチャんの腕の中には、……小さい黒猫の赤ん坊が、しっかり
抱かれていたのだ……。

「それで、ヒラミッドの地下への入り口は塞いで来たのかね？」

虹色広場でヒバの木のじーは、ゆっくりと三人に聞いた。

「ええ、嚴重に。でも、あの地下の根っこが、ヒバの木さんの
根っこだったなんて」

「ああ、一昔前、猫神が使い魔によって封じ込まれようとした
時、とっさに根を伸ばして、土砂に埋もれないように守ったの
じゃよ。あれは、良い神じゃった」

「やっぱり、ぽかちゃんサマは神サマなの？」

「西の砂漠の国に住む、水猫という妖力の強い魔族じゃ。しか
しその力を皆の幸せの為に使ったのなら、神と呼んでも良
かるう。もっとも今は、魔力も記憶も失せた、小さい弱い存在
でしかないが」

ヒバの木はさわさわと枝を揺らして、広場の端を見やった。

優しい七色の木漏れ日の中で、黄色い平凡な猫が、小さい平
凡な黒猫に、ハラシ力に分けて貰った乳を与えている。

「可愛いニヤア、一杯飲んで、おっきくなるニヤア」

柿ただちゃんが微笑んで近寄り、黒猫のほっぺをつついた。

「オイラ、気が付いたらこの子と一緒にいたニヤア。オイラの
弟かニヤア？ 子供って事はないよニヤア。何でも良いニヤ、

大事な家族ニヤ、ずっと一緒にいるニヤア」

「あの二人は僕が大切に見守るよ」

ヒバの木は優しく言って、三人は重ね重ねお礼を言った。それからポワポワ達から言付かって来たお礼も述べた。

「神サマって何なんだろうねえ…」

広場を後にしながら、風すっかが呟いた。

「厄介な存在には違いないけれど…」

「あら、ぼかにゃんサマは厄介じゃなかったでしょ」

「周りの者が厄介にしちゃうんだよ」

「風すっかは神サマが嫌いみたいだねえ」

だいちゃんは、最後に、ケッちゃんを振り返った。

「嫌いとかじゃなくて…。新潟の風すっか一族にも、地元で神って呼ばれている者がいるの。本人も困り気味…。祈られても困る。摂理道理の吹き方しか出来ないんだから。そしたら恨まれる。荒ぶる神だって」

「うむう…。そうか…。神サマって、結局周りが作り上げるモノなのか？」

「ぼかにゃんサマは、自分が神だなんて、一言も言わなかったわよ」

「神サマも信仰も、皆を幸せにする為にあって欲しいよ、神サマも含めてね」

だいちゃんが締め括くくり、風すっかも柿ただちゃんも頷いた。

ケッちゃんの幸せそうなあやし声と、黒猫の無邪気な笑い声が聞こえる。

空は高く澄んで、水も風も心地よく流れている。

くおしまい

二〇〇九・五・某

